
大波乱！Minecraft開拓記

氷連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大波乱！M i n e c r a f t 開拓記

【Nコード】

N 3 5 6 8 Z

【作者名】

氷連

【あらすじ】

人気箱庭ゲーム「M i n e c r a f t」

この物語はその世界に暮らす数人のクラフター達による波乱に満ちた開拓記録である。常識？なにそれ美味しいの？の状態で、果たして彼らは開拓を進められるのか！？

初投稿なので、変な部分もありますが生暖かい目で見てやって下さい

本編開始させます。

『残酷な描写あり』は敵とかとの戦いで使うので入れときました。

家に帰るまでが遠足です

人気PCゲームであるM i n e c r a f t。

この物語は、そんな世界で暮らす数人の人達が喧嘩したり、協力しあったりしてのんびりとは無く、行き当たりばったりの開拓をしていく物語(?)である。

――とある、森の中――

「道、こっちで合ってるの?」

赤色の髪の少年が隣にいる白髪の少女に聞く

「んー……多分大丈夫!こっちであってるはず!」

「……さっきから、同じ場所を歩いてる気がするのだが?」

後ろの方にいる黒髪の少年が半ば呆れたように言う

「う……だ、大丈夫よ!きっとそろそろ出口にでるから」

「はぁ……何で地図持って来なかったんだよ……」

「えー……だって近くだから、いいと思ったのよ」

「雀の方向音痴にも困ったな・・・」

「む・・・それ言っなら怜の無鉄砲なところの方が厄介よ!」

「それ言っならそっちの方が!」

「なによ!そっちの方が!」

「・・・どっちも厄介だな・・・」

「「蒼影は黙ってて!」」

蒼影が、喧嘩している二人を見ながら深いため息を着いたのだった

木の家に暖炉は危険（前書き）

暖炉を木の家で作った人はわかるはずですが・・・この複雑な気持ちを
会話文でお送りすることが多いと思います。ご了承ください

木の家に暖炉は危険

「それは、家が出来た後の話だった」

「よしっ！やつとできたぞー」

「・・・だいたいこんなもんだろっ」

「んー・・・なんだかなー」

「？」

「ん？どうした？」

「ん？いやさー・・・何か足りないのよねー・・・」

「そう？内装もかなりいいと思うけど・・・」

「んー・・・何だろう、こっつ暖かみの有るものが・・・」

「暖かみのあるものねえ・・・」

（何か嫌な予感がすんだが・・・）

「・・・」

（嫌な予感が・・・）

「あ！そうだ！」

「ん？何か思い付いたんか？」

「暖炉よ！暖炉！日本人と言えば暖炉でしょ！」

「おお！暖炉か！確かに暖炉は暖かいもんな！」

「でしょ！早く作りましょ！」

「暖炉に木の家……！あ、おいちよつと待て！」

蒼影の呼び止める暇なく作りに行ってしまった

「はあ、暖炉か……ネザーラックから木材に燃え移らないとい
いが……」

——数時間後——

「よし、出来た！試しにつけてみましょう！」

——点火——
パチパチパチ

「おー暖かい」

「一旦消そう」

パチパチパチ

「ん……？あれ、まだ火の音が……」

「つて・・・・・・・・」

「燃えてるし!!!」

「み、水！消さないと！」

「あわわわわ」

「はあ、やっぱりか・・・・」

――2時間後――

「あー・・・・・・・・」

「家が・・・・・・・・」

「燃えたな、見事に・・・・」

「木の家では、暖炉は無理か・・・・」

「あー・・・・・・・・夜になりそう」

「また、野宿か・・・・」

「せつかく家が出来たのに・・・・」

今回の教訓：木の家に、暖炉は危険。

リフォーム業者にご注意を！

「ふう、やっと家が直った……」

「なんとか直ったな……」

「つ、疲れた……」

「しかし、これで家が壊れる要素は無いはず……」

――マイン県クラフト市。ここにある問題を抱えたお宅が在りました――

「ナレーションが凄く不吉なんだが……」

――築数十分の家、しかしこの家には、ある重大な問題が――

「いや、あきらかに何処かのリフォーム番m……」「黙れや」
「……はい。」

――その問題とは……圧倒的に狭い空間――

――その問題を解決するためにある人物が立ち上がりました――

――その名も『クリーパー』又の名をリフォームの匠――

「え、いやちょ……」

シュー

――なんということでしょう。あんなにも狭かった空間が、広々とした空間になったではありませんか――

「……」

「おい、ナレーター……ちょっと、表でろや!」

――え? ちょ……いやいや、話せば分か……

「……分かんねえよ!」

――ナレーターがログアウトしました――

――その後……ナレーターを見たものは居ない――

今回の教訓: やりすぎは、ほどほどにしよう

マグマダイバー

「――とある洞窟――」

「だいぶ深くまで来たね」

「これ帰れる？」

「んー・・・多分」

「無理な気がする・・・」

「――まあ、私も無理だと思うよ――」

「いや、そこは肯定するなよ」

「あ、ダイヤ」

「の、近くにマグマが」

「んじゃ、俺が取ってくるぜ」

「あ、あと・・・いいか、絶対押すなよ？」

「「おい、やめろ」」

「あ」

ザバン

「あー……」

「だからやめろってあれほど……」

「――フラグ回収乙――」

「――地上――」

「「「……」」」

結果：鉄120個

レッドストーン78個

金34個

石炭247個

ダイヤ4個

「この数を……ロスト？」

「だな……」

「フラグ立てなきゃねえ……」

「水の泡になった……な」

「マゲマ恐るべし・・・」

今回の教訓：フラグはダメ、絶対

溪谷

「――溪谷付近――」

「おおー溪谷だ」

「おー、結構深い」

「どれぐらいの深さだろうね」

「落ちて見たら分かるんじゃない？」

「――よし、じゃあ逝ってこい――」

「いや、漢字間違えてるし、ついでに黒い」

「いや、どうせ落ちたら死ぬし合ってると思う」

「え」

「――ということだ……逝ってら――」

「え？いや、ちょ……m」

ドンッ

「うわああああ！？」

・
・
・

「チツ……死んで無かったか……」

「……そ、蒼影が黒い……」

今日の結論：蒼影Ⅱ二重人格

溪谷（後書き）

なんとなく、二重人格にしてみた。
後悔はしていない（キリッ

蒼「一旦地獄逝って来たら？」

うわ、黒い・・・黒砂糖より黒い

蒼「基準が分からないし、砂糖と比べるとか・・・やっぱり馬鹿だな」

どうやら、蒼影の暗黒面が出てしまったようです・・・

終末MOD 〱繰り返さない為に〱(前書き)

ちまたで噂の週末MODの話です。
間違ってたらすいません。

終末MOD へ繰り返さない為に

――ある森の中で――

「あれ？なんだろ・・・本？」

「ん・・・日記みたいだな」

「読んでみよう」

×月○日

太陽がやけに大きく見えるし、なんだか最近暑い。

いろいろ材料を集めて地下で暮らそうと思う

×月 日

さらに太陽が大きくなった気がする、動物に元気が無い・・・

なんとか、材料をあつめた。後は草を引こう

×月 - 日

木が枯れてきた・・・草も無くなって来てる・・・

なんとか草が引けた

畑を作る事にした。

x月
¢日

火の玉が降ってきた・・・
水も蒸発し始めている・・・
あ・・・羊が燃えた

地下に動物沸くかな・・・

x月
§日

水がだいぶ蒸発している・・・
外に出るだけで燃えてしまう

x月
∞日

水が消えた。

砂がガラスになっていた

ガラス越しならなんとか燃えない
地下をくりぬいて牧場を作った

x月
∂日

雨が降った

外には出れるみたい。でも戻ってきたら燃えてしまった。

x月%日

地下でならなんとか生きていけそうだ。でも外に出れない・・・

x月#日

地下で地上の様な暮らしができる。

それでも、私が死んだらお墓を立ててくれる人が居ないのと、動物達が気がかりだ・・・

これを見つけた人がいたら、この日記を埋めてほしい。
悲劇が、再び起きないように――

――後は、空白になっている――

「「・・・」」

「うん、あれだな・・・」

「終末か・・・」

「できれば来ないでほしいね……」

「この本どうする？」

「うーん……」

「お墓たててあげようか」

「そうだね」

――数十分後――

「よし、できた」

「こんな感じかな」

「後は看板かな」

「お花も置いておこう」

【名も無きクラフター此処に眠る】

「もう少ししたら、立派なお墓を建ててあげるからね」

「まあ、それまでは狭いがここで我慢してくれ」

「さて、鉱石でも探しに行くか」

「おう！」

「ありがとう・・・若きクラフター達よ・・・」

「ん？今何か聞こえなかったか？」

「ん？いや・・・」

「いや、でも今・・・」

「おい、早く行こうよ！」

「ああ、今行く」

その墓には赤い花が青空の下で風に揺れていた

村を発見！ バージョン1・8編

「―――砂漠地帯―――」

「暑い……」

「あつい――」

「……」

「―――そりゃ、砂漠なもんですから―――」

「まあ、そうだか……」

「何か面白いものでも無いかな――」

「あ、村あった」

「「ご都合主義か」「」

「―――このままだったら歩いてても、つまらんからね―――」

「「そういう問題か」「」

「―――はいはい、つべこべ言わず行く―――」

「（……ナレーターの癖に……）」

「――何か?――」

「「「いえ、何も」「」」

「――ならよろしい♪――」

「・・・とりあえず行くか」

「ああ・・・」

「――村――」

「誰もいない・・・」

「村人居ない・・・」

「――村人は1・9から追加です♪――」

「「「さきに言えよ!」「」」

今回の教訓：事前確認をしましょう。

第一回反省会

「さあ、やってまいりました第一回反省会！――」

「色々反省する要素が多いと思う」

「まあ、それは置いといて。ある重要――
は事に気がついたんだよ

（スルー！？）

「――開拓記って言うときながら、ただのネタになっている事に！
――」

「――やっと気がついたか――」

「――ですよね――」

「――なので、茶番はここまでにして本編に入ろうと思う――」

「何故、最初から本編にしなかったんだ？」

「――いや、茶番から入った方が新鮮でいいかと――」

「むしろ、ダメだろ」

「――ということで、次回から本編入りますよっと――」

―――見ている皆様に迷惑をかけて申し訳ありませんでした―――

始まりは突然に（前書き）

ようやく、本編始動です。お待ちせしました

始まりは突然に

――全ての物がブロックで出来ている世界「M i n e c r a f t」
この物語はこの世界で生きるクラフター達による開拓記である――

「はあ、何だよ……この世界……」

俺は、朝日あさひ 蒼影そうえい

現役の高校生……だった……

なぜ過去形なのかと言うとそれは少し時間をさかのぼることになる・
・

俺は、高校の2年生で丁度冬休みの前の事だったな――

「おい、蒼影冬休みの予定立てようぜ」

あ、ちなみにこいつは笹野ささの 玲れい

どういう訳か小学校から同じクラスで色々と問題を起こすいわゆる
トラブルメイカーだな。

俺も巻き込まれる訳だが……

全く・・・勘弁してほしいものだ・・・

「別に良いが・・・」

「よっしゃ」

はあ、どうも俺はこいつのテンションにはついていけない・・・

「んーとじゃあさー」

ーで話し合いの結果、クリスマスの日にパーティーをしようと言う話になった。

その他の日は日程が合わずにクリスマスの日だけになった。

正直言つと、これだけでかなり疲れた・・・

しかし、それも叶わぬ夢になってしまった・・・

問題は学校の帰り道で起きたーーー

「蒼影！一緒に帰ろうぜー」

「ああ」

「お？誰かと思えば蒼影じゃん」

うわ・・・現時点で一番会いたくないのに会った・・・

「なんで居るんだよ・・・」

「超能力でワープしたのさ」

「訳わからん・・・」

連椎 鈴れんすい すず

この人も変わっています・・・

この人の普通じゃない理由？すぐに分かりますよ・・・

「あ、そうだ！新しい薬作ったんだけど・・・蒼影、飲んでみる？」

「いや、遠慮しておく・・・」

そう、この人は――

「んー、そっかー・・・安全なんだけどねー」

「で、なんの薬？」

「傷が回復する薬」

「「どうやったら出来るんだ!?!」」

・
・
科学者。それも、国から感謝状まで貰うほどの実力……なのだが・

「よし!次は麻痺を治す薬を作ろう!」

頑張る方向が斜め上なのだ……

「「用途が分からん!!!」」

「えー、そう?もしかしたら使うかもよ?」

実際に……使っはめになったが……

「まあ、それは良いから帰ろうか」

「ん、そうだな……」

「あ、うん」

「――その時だった。」

目の前に黒い穴のようなものが空いて・・・

「「!?!」」

「わゝなにこれ凄い!」

「って言ってる場合じゃ・・・」

あっという間に引きずりこまれていった―

「「「うわああ!?!」」」

「――で現在に至る

「すごいね―この世界!というより、異世界があったなんて!」

「んー・・・異世界か―」

そう言えば、どっかで見たことあるな・・・

「なあ、怜どっかで見たこと無いか?」

「んー、見たことあるような・・・」

「・・・あー思い出した」

「え、まじ!?!」

「・・・そう、この世界はー」

「M i n e c r a f tの世界に似ているような・・・」

「あ、言われてみれば・・・」

「おお!なるほど・・・」

「「「・・・」」」

「「「なんだってー!?!」」」

「どうやら、M i n e c r a f tの世界に来てしまったようです。」

「さてーどうするかな?」

拠点作り

「とりあえず・・・木を切って、道具を揃えて仮拠点でも作るか」

「役割どうする？」

あー・・・どうすっかな

「じゃあ、俺食料探してくるわ」

「んじゃ私は、家の設計でもするかな」

「んじゃ、木切って来るわ」

「あ、蒼影」

「ん？」

「剣作るからちょっと待って」

「ああ」

――森の中――

「食料つてもなあ・・・」

「何か食べれそうな物は・・・」

「お、カボチャ」

「食べれそうかな？」

「うーん、他には無いかなー」

「お、雑草」

「雑草刈り取ったら種が出てきたな」

「小麦の種だっけ、確か・・・」

「これを集めて育てればパンが作れそうだな」

「お、キノコがある。食べれる・・・のか？」

「一応持つて行くか」

「うーん、野菜ばかりかー」

「お肉とか・・・」

「お、動物がたくさんいる」

・・・さて、目の前には動物。手元には剣・・・

残酷な気がするが・・・仕方ない・・・よな？

ついでに、羊毛も持っていくかな・・・

「ただいまー」

「お、帰ってきたー」

「おかえりー」

「お、家が出来てる」

「二人いるとやっぱりはかどるよね」

「そろそろ暗くなりそうだな・・・」

「んじゃ、家に入ろう」

「おー、なかなか食べ物が集まったね」

「おー、お肉もある」

「こっちは、軽くトラウマになりかけたよ……」

「うーん、でも慣れれば大丈夫でしょ」

「まあ、生きるの為なら仕方ないか……」

まあ、食べ物の有り難みが分かって良かったかもな……

今回犠牲になった動物達に黙祷……

「まあ、今回小麦の種が手に入ったから、畑を作ればある程度は大丈夫だな」

糸が手に入ったら、釣りざおでも作るかな……

「それにしても……外がうるさい……」

ゾンビとかが、煩いな……

「でも、防具が無い今、行っても死ぬだけかな」

そうだな、そのうち洞窟でも行くかな

その前に防具・・・牛の革で作れそうだな

・・・明日、集めるとするか

「とりあえず、周囲の散策は明日だな」

「そうだねー」

「んじゃ、また明日」

「「「おやすみー」」」

自分の部屋・・・（良く作れたな…）に行きそのまま眠りについた

さて・・・明日は忙しくなりそうだ

周囲を探索

――翌朝――

「「「おはよー」「」」

「朝ごはん食べようか」

――

「さて・・・今日は何する？」

「ん、俺はそこら辺見てくるわ」

「畑作るー」

「じゃあ、私はこの世界の研究でもするかな」

「道具あるの？」

「もちろん！科学者は道具を持ち歩くもの！」

うん、なんか違う気がする・・・

「んじゃ、行ってくるわ」

――――

さて、昨日の所とは反対側に行ってみるかな・・・
念のために剣を持っていくか

「んー・・・この辺りは木が多いな」

シュー

「!？」

ドカーン！

「あつぶね！」

危うく巻き込まれる所だった・・・

早めに防具作らなきゃな・・・

「ん？あれは？」

「鉄か!？」

結構あるな・・・防具とか作れそうかな

14個か・・・

まあ、洞窟のそとに出てるのは珍しいか・・・

さて、暗くなる前に戻るかな

「お、おかえりー!」

「何かあつた？」

「鉄が14個あつた」

「おお!それならバケツ作れる!」

「いや、それより武器とかを・・・」

「ああ、その心配なら大丈夫」

「？」

「フフフゝなんとだねゝ」

「武器と防具を科学によって作り出したのだ！」

・・・は？

「すまない、もう一度」

「うん？だから科学で武器と防具を作れたんだよ！」

「マジ？」

「マジ」

どんなチートだよ・・・

まあ、なら敵と戦えるな

「と、いう訳でだ夕飯を食べたら敵と戦ってみてくれ」

「はぁ・・・分かったよ」

・・・さて、俺の力は何処まで通用するのやら？

クリスマス ―番外編―（前書き）

皆様、今日はクリスマスです。なので、今回はクリスマスと題していろいろと語ります

クリスマス ―番外編―

――ジングルベル～ ジングルベル～ 鈴が鳴る――

――今日は楽しいクリスマス♪――

「今日はいつにも増してハイテンションだな」

――そりゃ、クリスマスだからだぜ――

「へえ、クリスマスねえ」

「クリスマスか・・・」

「んで、氷連はなにもらっただ？」

――x - box360をもらっただぜ――

「へえ・・・」

――まあ、サンタは居ないがな――

「」（なんともまた、夢を壊す発言を・・・）」「」

――まあ、その話は置いてだな――

「……クリスマスと言えばケーキだ！……」

「まあ、そうだな」

「ケーキは母意外認めません」

「……チョコケーキが好きな私が通りますよっと……」

「「殺してでも奪い取る！」」

「……な、なにをする貴様ら！……」

「一回死んで来る？」

「「すいませんでした」」

「……すいませんでした……」

「……しかし、チョコケーキは旨いよ、うん……」

「生チョコケーキがうまいな」

「……生チョコだと甘すぎて食べれん……」

「まあ、俺は食べれるかな」

「チツ」

「おい」

「まあ、それは良いとして・・・そろそろ年賀状を出さなければだね」

「ここまでくるところ間に合わないかもな」

「まあ、出したんだがな」

「さて、クリスマスに話を戻そうか？」

「お前が変えたんだろう」

「まあ、そうとも言っ」

「・・・」

「クリスマスは、あまり外に出たくないな・・・」

「何故？」

「……え？何故かって？リア充を見たくないからです――」

「お前、恋人とか居な……」「黙れや」……」

「……あゝTNTが欲しいわ……――」

「」「やめとけ」「」

「――チツ――」

「――まあ、それはいいかさて……そろそろ終わりにしようかね？――」

「ん、そうだな」

「――では、皆さん――」

「「「メリークリスマス！」」」

「……さ……先に言われた……あ、皆さん……メリークリスマス……」

取り合えず、戦ってみよう(前書き)

注意

- ・敵が喋ります
- ・厨二的な表現が出たりするかもしれません

上の時点で気分を害された方はブラウザバック推奨

取り合えず、戦ってみよう

はあ、全く・・・どうしてこうなったんだろう

現在進行形でピンチです。

え？それじゃ分からないって？

つまり、追いかけてます、敵に

んで、今後ろに居るのが

クリーパー x 3

ゾンビ x 5

スケルトン x 2

もはや、勝てる気がしないですね、はい。

かといって、このまま逃げても無理がある、と・・・

仕方ない・・・腹を決めるかな・・・

はつきり言つと使いたくない・・・これのおかげで何かしらのトラブルに巻き込まれやすいんだよねー

はあ、仕方ないか

「ふん・・・散々逃げ回ってくれたな」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ハハ・・・・・・・・アハハハハ！」

「・・・・・・・・血迷ったか」

「えゝ血迷った？そんなことはないんだけどねゝ」

「まあ、どうでもいいけどさ」

「あ、今のうち言つとくけど・・・・・・・・死にたくない奴は逃げてい
いよ？」

「は・・・・・・・・何を言っている・・・・・・・・どう見てもお前が不利だ
ろっ？」

「まあ・・・・・・・・イマハネ？ー」

「！？」

一瞬の内に背後に回り込み……

「ねえ？知ってる？数が多い軍に一人で勝った人の物語」

「その軍は、兵もたくさん居て有利だった訳よ」

「でもね、負けたの」

「何でだと思う？」

「……………」

「その軍はねー数だけにこだわって弱い兵を沢山集めたからだよ？」

「…………何が言いたい」

「その意味は自分で考えてみたら？ジゴクデネー」

ボトリ…………

スケルトンの首が音を立てて地面に落ちた

空気が凍った――

蒼影が笑いを浮かべながら、残っている敵に静かに言った

「サアーーーー？物語ノ結末ヲミテミヨウカ？」

「物語の結末？ただ、辺り一面血の海になるだけだよ」

誰かがそう呟いた――

「はあ、やり過ぎたか・・・」

「・・・・・・・・とつとと帰るかな・・・」

物語ノ結末ハーーーータダ、虚しいダケダヨ？

「ただいまー……………」

「蒼影！？良かった心配してたんだよ！って服真っ赤じゃない！」

「蒼影！？大丈夫か！？」

「ん……大丈夫、全部返り血だ」

「……………また『アレ』？」

「……………ああ」

「ん？アレって何？」

「嫌、気にするな」

こいつにだけは——見せたくないな…………『アレ』は狂ってるから…………

「はあ、疲れた……………」

今日はもう休もう・・・

明日・・・また頑張ればいいさ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3568z/>

大波乱！Minecraft開拓記

2011年12月29日01時58分発行